# 「まだ憂いをご存じなかったのですか？」

『存在と時間』197ページの脚注が、私たちに示唆するもの

川口茂雄（甲南大学）

# 『存在と時間』197ページのあの脚注。

- ブールダハという人物の論考「ファウストとゾルゲ」が参照されている。

- Konrad Burdach, “Faust und die Sorge”,

  *Deutsche Vierteljahrsschrift*, 1.Jahrg., 1923, 1.Band, S.1-60.

⇒ この参照はなんなのか？

# これについての先行研究は？

- たぶん的場先生の論文ぐらいしかないように思われる。

- Vgl. 的場哲朗「ハイデッガーのゲーテ論――《ゲーテの言葉は目配せである》」

『モルフォロギア　ゲーテと自然科学』No.14、1992年.

- 最近では、小森謙一郎『アーレント　最後の言葉』（講談社選書メチエ、2017年）で少しだけ言及されている…！！

では、ブールダハの論文を実際に読んでみて、そこからハイデガーの「ゾルゲ」についてなにかがわかるか、見てみよう。

（これが今日の内容。）

まずその前に

# ゲーテ『ファウスト』第二部第五幕

「ゾルゲ」を含む「四人の女」が出現する場面

＝作品の終盤部分です

# 『ファウスト』第二部　11384行～「真夜中」【高橋義孝訳】

灰色の女、四人登場。

第一の女　わたしの名は欠乏。

第二の女　わたしは罪過。

第三の女　わたしの名は憂い。

第四の女　わたしは困窮。

三人で　戸が締まっていて、入れないね。
この中には富貴の人が住んでいる。入りたくない。

# 『ファウスト』第二部　11384行～「真夜中」　【高橋義孝訳】

欠乏　入ったら、わたしは影になってしまう。
罪過　わたしは消えてなくなってしまう。
困窮　贅沢な人はわたしから顔をそむけていまいます。
憂い　皆さんは入れないし、入ってはいけない。
けれども、わたしは鍵穴から忍び込んでしまう。（憂い、退場）

欠乏　ねえ、皆さん、帰りましょう。
罪過　わたし、あなたにぴったりくっついていよう。
困窮　わたしはあなたのかかとにくっついて行こう。

# ドイツ語では（最初の部分）

MITTERNACHT

*Vier graue Weiber treten auf*

**ERSTE.** Ich heiße der Mangel.

**ZWEITE.** Ich heiße die Schuld.

**DRITTE.** Ich heiße die Sorge.

**VIERTE.** Ich heiße die Not.

**ZU DREI.** Die Tür ist verschlossen, wir können nicht ein;
Drin wohnet ein Reicher, wir mögen nicht'nein.

……

# 『ファウスト』第二部　11384行～　【大山定一訳】

第一の女　わたしの名は不足といいます。

第二の女　わたしの名は罪といいます。

第三の女　わたしの名は憂いといいます。

第四の女　わたしの名は苦といいます。

三人いっしょに　戸が締まっていて、はいれませんのね。
なかにはお金持ちがいるから、はいりたくもないわ。

不足　そんなら、わたしは影になるわ。
罪　わたしはすっかり無くなってしまいますわ。
苦　ぜいたくな人は、わたしからすぐ顔をそむけますわ。

憂い　あなたたち、ここへは入れないわ。いいえ、入ったら
いけないわ。
わたしだけは鍵穴から、そっと入ってよ。〔憂い、姿を消す〕

つまり・・・・・

- 四人のうち、他の三人（不足、罪責、苦境）は入れない。

⇒ 尋常の人間ではないファウストにとっては解消済みの問題にすぎない。彼にとっては悩む必要がない事柄、ということか？

しかし、

- なぜか「憂い（ゾルゲ）」だけが、ファウストの居室にすっと入ることができる。

# この場面についてはさまざまな解釈があるが、いまだに決定的なものはない。

（なぜ3人は入れないのか？　ゾルゲとは何者か？　なぜこのタイミングで？）

- 晩年のゲーテの創作力が衰えて、話の脈絡の断絶、飛躍、不統一があるのではないか、というような種類のことも、一応考慮しないわけにはいかないです。

- しかし、それにしては印象に残る場面であり、また、作品の最終部分の直前という位置上の重要性からも、十分な検討が必要でありそうですね。

# たとえば… （既存の解釈例）

- ファウストはメフィストフェレスの魔法によって不老不死ではあるが、百歳を越え、さすがに肉体に衰えが来た。それで「ゾルゲ」にとりつかれた、ないしは、「ゾルゲ」は身体的衰えの象徴である、とする説。
- ＝クーノー・フィッシャー（19世紀の有名な哲学史家）などが提案。

- ファウストは普通の人間ではなく、メフィストの魔法で超人的な存在になっている。だから普通の人の「ゾルゲ」や日常的な「ゾルゲ」とは異なる、ファウストに固有の、超人であるがゆえの別種の「ゾルゲ」を持ってしまうという説。
- ＝典型として文献学者・教育学者のG. Rosenthalの名をブールダハは挙げている。

# また『ファウスト』全体の解釈路線におおまかに2種類

- Perfektibilismus的な解釈

（完成主義、改善主義）

- 人物ファウストはたえず努力し、成長し、徳を積み、道徳的に高いものとなり、それゆえに最後にメフィストの手から彼の魂は逃れ救済されたので、とみる説。
- 啓蒙主義的、進歩史観的？
- 文献学的な《作品に一貫性がある》という主張と呼応

- Antiperfektibilismus的な解釈

（非完成主義）

- 人物ファウストは、何の成長もしていない。進歩なし。
- なぜか恩寵が突然やってきて救済された。終わり。という説。
- ある意味、神的な恩寵の絶対性を尊重している？
- 文献学的には、作品が断片寄せ集め的で一貫性のないものであるとみる見解に呼応？

どちらの解釈路線をとる？
どちらでもない解釈を探す？
…etc.

# ゾルゲに対面したときのファウストの発言をチェック

ファウスト　来たのは四人だが、帰ったのは三人だ。
話の中身は分からなかった。
何か、困窮（Not）というような言葉も聞こえ残ったが、
それに合わせて、陰鬱な、死（Tod）という言葉もあったようだ。
うつろな亡霊のような、低い声だった。
……

（ぎょっとして）誰かそこにいるのか。

# ゾルゲに対面したときのファウストの発言をチェック

憂い　おおせの通りです。

ファウスト　そう言うお前は何者だ。

憂い　とにかく参上いたしました。

ファウスト　さがれ。

憂い　いえ、わたしはここにいて差し支えないのです。

ファウスト　（初め激昂し、やがて気を静め、つぶやくように）

いいか、呪文など唱えるな。

# ゾルゲに対面したときのファウストの発言をチェック

憂い　　わたしの言葉は耳に聞こえなくても、
胸のうちには響くはずです。
……
まだ憂いをご存じなかったのですか？

ファウスト　おれはただこの世の中を駆け抜けてきた！
あらゆる快楽の襟髪をつかみ、
自分を満足させないものは、去るに任せ、……
ただ望んで、ただ望みを遂げ、
さらに望みを新たにして、そんなふうに強引に、
生涯を突進して今日に至った。……

憂い　　まだ憂いをご存じなかったのですか？

ファウスト　おれはただこの世の中を駆け抜けてきた！

⇒ ファウストは、《憂いを知っていたかどうか》という問いただしに対して、Yes/Noでは答えていない。（このことにブールダハ強く着目）

→ この点をどう解釈するか？？

ゾルゲはもともとあったものか？、ある時とり憑くものか？

# 『ファウスト』第二部この箇所の「ゾルゲ」の訳いくつか

# 英語訳では

- 「care」という訳

My name is Want.

My name is Debt.

My name is Care.

My name is Need.

- 「worry」という訳

My name, it is Want.

And my name is Guilt.

My name, it is Worry.

And mine is Distress.

- （フランス語訳はだいたい「souci」。）

# 日本語訳では

「憂い」

「憂愁」

「心配」

など。

# 「ゾルゲ」という語についての、ブールダハの考察

（を、適宜Grimm辞書や他の文献で補いつつ、紹介・検討していきます）

# ブールダハの考察スタンス

- ブールダハは、ゲーテの『ファウスト』をよりよく理解するために、

『ファウスト』作品内部だけではなく、

- 西洋文化の歴史におけるさまざまな「ゾルゲ」関連のテクストを参照して、

- 「ゾルゲ」とはどういうものなのかを見きわめていこうとする。

『存在と時間』でハイデガーが引用・紹介しているように、
ブールダハがおもにたどるのは、

- ギリシア語の「 μεριμνα 」
- ラテン語の「sollicitudo」と「cura」

です。

# ストア派の「sollicitudo」「cura」①

- セネカ（紀元前1年～後65年）やキケロ（紀元前106年～前43年）などの、ストア派関係の人物の文章には単語「sollicitudo」がよくつかわれる。

- ブールダハが典型として挙げるのはセネカの『倫理書簡集』の文章です。

# ストア派の「sollicitudo」「cura」②

- セネカ『倫理書簡集』
- 第90書簡

「〔かつて〕人々はどこかの深い森の中で日差しから身を守り、厳しい冬の寒さや雨にたいしても木々の葉陰をつつましい隠れ家として、無事に暮らしていた。夜のあいだも穏やかに、ため息をつくこともなく過ごしていた。〔しかし現在〕私たちは、〔贅沢な〕紫のベッドの上で、不安（sollicitudo）にかられて寝返りを打ち、鋭い棘に心をさいなまれている。」

# ストア派の「sollicitudo」「cura」③

- 他方で、同じセネカ『倫理書簡集』の最後、
  第124書簡では。

「自然には四種類がある。植物、動物、人間、神のそれぞれがもつ自然だ。後の二つは理性的であり、同じ自然本性を持つが、相違は一方が死すべきもの、他方が不死なるものだという点にある。それゆえ、一方のつまり神の場合には、その善を完成させるのは自然であるが、他方のつまり人間の場合には、その善を完全にするのは配慮（cura）である。」

（この箇所は『存在と時間』199ページにも引用されていましたね。）

# ストア派の「sollicitudo」「cura」④

- 要するに、

- ストア派の「sollicitudo」や「cura」には、
- （雑念・しがらみ・悩みなどの）ネガティヴな意味と、
- 人間の自然本性のよき完成（perfectio）に向かうことに関係あるらしいポジティヴな意味との、《二重性》があったということが確認できます。

# ホラティウス『カルミナ』①

- ウェルギリウスと並んで古代ローマ最高の詩人とみなされているホラティウス（紀元前65年～前8年）。

（さっきのセネカさんよりホラティウスさんのほうが60歳くらいだけ先輩です。）

- ホラティウスの『カルミナ』のなかにも、「cura」についての非常に典型的な考えが込められているとみなされる詩句があります。

# ホラティウス『カルミナ』②

- 『カルミナ』第3巻 1

「しかし《怖れ Timor》と《脅威 Minae》は〔権力と建物を持つ〕地主と同じ高さにまで登り上がる。

青銅で飾られた〔豪奢な〕船にも、馬に乗れば騎者の背後にも、《心労 Cura》はとどまって去らない」

# ホラティウス『カルミナ』③

- 続いて『カルミナ』第2巻 16

「〔心の平安、〕それは宝石でも、紫の布でも、黄金でも買うことができないもの。

　財産も、執政官の権力も、心のみじめな動揺を、家々の屋根の上を飛びめぐる諸々の心労 curasを、立ち去らせることはない」

「病める心労curaは、牡鹿よりも速く、雨雲を散らせる東風よりも速いから」

# ホラティウス『カルミナ』④

- ホラティウスの『カルミナ』には皆さんもお聞きになったことがあるかもしれない名言が複数あります。
- そういえばそれらの名言は、直接「cura」という単語を使っていなくても、事柄として「cura」ととても関係があるとも見ることができそうです。

# ホラティウス『カルミナ』⑤

“Quid sit futurum cras fuge quaere”
「明日なにが起こるのか、問い求めるのは避けよ。」

———『カルミナ』第1巻 9

“Carpe diem, quam minimum credula postero.”
「この日をつかめ。〔今日を収穫せよ。いまを生きろ。〕
　最小限にしか未来を信じるな。」

———『カルミナ』第1巻 11

類似した思想内容が他にもどこかで・・・

# 新約聖書での「μεριμνα 」①

- 「明日のことを思いわずらうな（μη μεριμνησητε）。明日のことは明日みずからが思いわずらう。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

（マタイ 6:34）

- 「命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思い悩むな（μη μεριμνατε）。……あなたがたのうちの誰が、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。こんなごく小さなことでもできないのに、なぜ、ほかのことまで思い悩むのか。野の花がどのように育つかを考えてみなさい。野の花は、働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにさえ着飾ってはいなかった。」

（ルカ 12:22-27）

# 新約聖書での「μεριμνα 」②

また、福音書以外の箇所でも。

- 「あなたがたの思いわずらいを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」

（ペテロの手紙第一５：7）

# 新約聖書での「μεριμνα 」③

そして、

- 近世になってルター（1483年-1546年）がこうした箇所の名詞「μεριμνα」・動詞「μεριμναω」を、名詞「sorge」・動詞「sorgen」でドイツ語訳した。

- 「Darum <u>sorget</u> nicht für den andern Morgen」（マタイ 6:34）

- 「<u>Sorget</u> nicht für euer Leben, was ihr essen sollt, auch nicht für euren Leib, was ihr antun sollt.」（ルカ 12:22-27）

# 新約聖書での「μεριμνα 」④

「あなたがたの思いわずらいを、いっさい神にゆだねなさい。
神があなたがたのことを心配してくださるからです。」

（ペテロの手紙第一 5：7）

- ルター訳

  「Alle euer Sorge werfet auf ihn; denn er sorget für euch.」

- 英語訳

  「Casting all your care upon him; for he careth for you.」

# 新約聖書での「μεριμνα 」⑤

「あなたがたの思いわずらいを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」

（ペテロの手紙第一 5：7）

- また、同箇所のラテン語訳（ウルガタ）

「omnem sollicitudinem vestram proicientes in eum, quoniam ipsi cura est de vobis. 」

- フランス語訳の一例

「déchargez-vous sur lui de toutes vos sollicitudes, car lui-même prend soin de vous.」

# 新約聖書での「μεριμνα 」⑥

他方で、

- 新訳にはポジティヴな意味と思われる「μεριμνα」の用法もまた存在している。

「体は、ひとつの部分ではなく、多くの部分からなっています。……目が手に向かって《お前は要らない》とは言えず、また頭が足に向かって《お前は要らない》とも言えません。……それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いにいたわり（μεριμνωσιν）あっています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」

（第一コリント 12：14-26）

# 新約聖書での「μεριμνα 」⑦

- この箇所のルター訳
  「die Glieder füreinander gleich sorgen.」

⇒ つまりルター訳ドイツ語でも「sorge」「sorgen」は、ラテン語の「cura」「sollicitudo」と同様に、用例的に二重の意味が見出される単語であることがわかります。

（ちなみに英語訳の一例：「 the members should have the same care one for another.」）

# 新約聖書での「μεριμνα 」⑧

そう考えると、あの解釈が分かれる「マルタとマリア」の箇所についても、単語「Sorge」「μεριμνα」の二重性ということが関連しているのだと言えそうです。

- …… 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。

# 新約聖書での「μεριμνα 」⑨

《主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。》

主はお答えになった。

《マルタ、マルタ、あなたは多くのことに気づかい（μεριμνας）をして、心配している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない》

（ルカ 10:38-42）

# 新約聖書での「μεριμνα 」⑩

- 家の仕事をケアし、客人のもてなしに気を配る（おそらく姉の）マルタ。
- マルタは妹よりも“気が散っている”、“主の言葉に専心できていない”、とは解釈できる。
- でもそれだけですませてよいか。

- ちなみに中世のマイスター・エックハルト（1260?-1328?）は、マルタのほうをむしろ評価。
- 「気をつかっている（sorcsam）」ことはマルタが被造物として最高のあり方をしているということを意味しているのだ、等と述べる。

（ ⇒ Hingabeとしてのvita activaの肯定？）

# ウェルギリウス『アエネイス』①

- 最後に、もう一度近世からローマ時代に戻って、いま一人の重要な詩人の詩作のなかで「cura」がどう出てきていたかを見ておきましょう。
- すなわち、ウェルギリウスの『アエネイス』。

- ゲーテの『ファウスト』でと同じように、いわば擬人化された「cura」は単独ではなく、他の者たちとともに並んで現われる、という感じです。

（クーラ自体も複数形の「curae」になっており、複数いるようです）

# ウェルギリウス『アエネイス』②

- 『アエネイス』第6歌　270行～〔アエネーアスが冥界に入ってゆく場面〕

森の中を進むように、そこでは、ユピテルが天空を闇で覆い、
黒い夜が世界から色を奪ってしまっている。
ちょうど冥界の前庭にまでたどり着き、そこには
「悲嘆」と執念深い「懊悩 curae」たちが横たわっていた。
蒼ざめた「病」や陰鬱な「老い」が巣くい、
「恐れ」に、悪へ誘う「飢餓」と醜悪な「窮乏」、
目にするも恐ろしき姿の「死」と「労苦」。……

# ウェルギリウス『アエネイス』③

⇒ゲーテは『アエネイス』のこの場面を知っていて、登場する諸々のものをいくらか整理して、あの「灰色の四人」が訪れる場面を創作したのではないか、とブールダハは見る。

わたしの名は欠乏。

わたしは罪過。

わたしの名は憂い。

わたしは困窮。

# ドイツ語史的な観点からの若干の補足

# ドイツ語の単語「Sorge」の語源は？　①

- ゴート語　　「saurga」
- 古低フランク語「sorga」
- 東フランク語　「suorga」
- 中英語　　「sorwe」

（ ⇒ これが近代英語「sorrow」になる）

など

・ 中高ドイツ語の時代で語形はほぼ「sorge」に安定する

・ ルターが聖書訳で多用

# 単語「Sorge」の語源は？　②

- もっと遡ってゲルマン祖語やインド・ヨーロッパ祖語あたりでどうなっていたのかは、結局よくわからないことも多い

・古アイルランド語「serg」、リトアニア語「sergu」
＝「病気である」

・あるいはリトアニア語「sergiu」＝「守る」から？

- ラテン語の「servare」も関係？

・ゲルマン語では「schwer」と共通の語源という推測も？

- 音素的に無理があるが「Schmerz」と近い語源を推測した学者も。（Grimmより）

# 暫定的なまとめ：『存在と時間』での「ゾルゲ」とは結局なんであるのか？

# 現存在の統一的ななにか？

- Der “Doppelsinn” von “cura” meint eine Grundverfassung in ihrer wesenhaft zweifachen Struktur des geworfenen Entwurfs. …… Die existenziale Bedingung der Möglichkeit von “Lebenssorge” und “Hingabe” muss in einem ursprünglichen, das heisst ontologischen Sinne als Sorge begriffen werden.

(SuZ S.199)

# そこから考えられること

- 心配する／待ち遠しく思う　　に、
  共通するものはあるか

- 愛する／憎む

（ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハなどの中世の詩作品では「sorge」は「恋の苦しみ」に関連した用法がしばしばだという）

- 恐れ避ける／頼り慕う

- 気が散る／集中

「私たちは、紫のベッドの上で、不安にかられて眠れず寝返りを打ち、鋭い棘に心をさいなまれている。」

「あなたは多くのことに気づかいをして、心配している。」

# 「不安」の件

- 「不安 Angst」とは、

- 怖くて落ち着かないことなのか、
- 醒めきって、落ち着いていることなのか、

- どちらでもある、というのが『存在と時間』の見解のよう

「ゾルゲ」が、

- 「心配で恐れている」のか、
- 「専心し、雑念なく冷静に集中している」のかは、

———これも、どちらでもあるというのが、事柄ではないか。

ところが、「心配して恐れる」と「雑念なく落ち着いてケアする」との共通内容をひとことで言い表わす言葉を、私たちは持たない。

理由はわからないが、とにかく持っていない。

その「共通のなにか」を（形式的提示として）表現しようとしたものが、『存在と時間』での「ゾルゲ」という言葉の（新しい）用法だったかもしれませんね。

まだゾルゲをご存じなかったのですか？

おれはただこの世の中を駆け抜けてきた！……

# なお・・・

- ブールダハ自身は、ファウストの「ゾルゲ」は、誰もがもつものであるが特に指導者的存在・王的存在がもつ、自分だけでなく自分も含めた人々みんなの自由を気づかう気持ち、カントの実践理性の意味での「自由」、「組織された自由」としての「国」の実現を気づかうもの、と解釈しています。
- その意味でゲーテはファウストという人物に「モーセ」「フリードリヒ2世」「ナポレオン」そして民主主義新国家「アメリカ」〔＝当時ドイツは自由主義や民主主義を導入できていなかった〕といったものを重層的に重ね合わせたのでは、とも示唆しています。
- 日本の政治家さんにももっと「ゾルゲ」してほしいですね！

あなたは「ゾルゲ」、どうとらえますか？
そして、どう訳しますか？